午後の恋人 上

平岩弓枝

午後の恋人　上

昭和五十四年四月二十五日　第一刷

定価　八八〇円

著者　平岩弓枝

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋

〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三

印刷所　凸版印刷

製本所　矢嶋製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Yumie Hiraiwa 1979　Printed in Japan

午後の恋人

上

装幀　粟屋　充

夫婦

マンションのドアに鍵をさし込む音がしたとき、明子は奥の和室で足袋をはきかけていた。

これから、着がえるところで、体には肌襦袢に裾よけ、長襦袢を肩に羽織ったきりである。南むきの部屋は陽が充分すぎるほど射し込んでいる時刻で、そんな恰好でも決して寒くはない。晴れていれば、日中は暖房のいらない部屋なのである。

中腰になった明子の位置から、ドアをあけて入って来た夫の姿がみえた。

手に、パリの有名鞄店のボストンバッグを下げている。昨日の朝、家を出る時に持って行ったもので、男には少しキザな感じだが、信吉はなんでもなく使いこなしている。

「どうしたの、早かったじゃない」

三日ばかり、大阪へ出張といって出かけた夫である。

明子は足袋をはいてしまい、立ち上って長襦袢の前を合せた。

月に三回ある謡の稽古日で、鎌倉へ出かけるつもりである。

信吉はリビングの椅子に腰かけていた。

ポケットから煙草を出している。どことなく大儀そうにみえた。表情が屈託している。

仕事に、なにか手落ちがあったのかと思った。

もっとも、会社が、彼にそう責任を必要とする仕事を与えていないのを、明子は知っている。

佐伯商事という、婦人服や布地、ハンドバッグ、アクセサリイなどを輸入販売している会社であった。

社長は父親だが、七十五歳の高齢なので、実際には、長女の聟に当る進一郎というのが殆どをとりしきっている。

信吉は長男だが、実務に向かないという理由で、肩書だけは常務取締役といかめしいが、たいした仕事をしているわけではなかった。

性格に散文的なところがあって、意欲はあるのだが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「信吉は遊ばせておくほうが、会社の損にならない」
と、父親がいったというのが、一族の間で有名になっている。
「どうしたの、風邪でもひいたの」
帯を締めながら、もう一度、声をかけた。
七歳も年上の夫だったが、子供のないせいもあって、明子は夫に対して、いつの頃からか、母親のような口のきき方をしていた。
勿論、自分で意識して、そうしているわけではない。
信吉はテラスの明るさに、眉をしかめていた。
眩しそうな眼を、伏せ加減にして、明子のほうへ向ける。
「出かけるのか」
「謡のお稽古日なんです」
みたらわかりそうなものだと思いながら、明子は帯を締めていた。
リビングのテーブルの上には、ハンドバッグと並べて、謡の稽古本がおいてある。信吉の眼の前であった。
「具合が悪いのなら、安藤先生へ行ってらしたら……」
夫の顔色をみて、明子はいった。
丈夫なほうではなかった。実際は丈夫なのかも知れなかったが、まめに医者へ行く男である。
一人っきりの男の子で、大事に育てられた名残りかも知れない。
信吉は、煙草をふかしている。
優柔不断というほどでもないが、てきぱきというほうでもない。その信吉が、不意に顔を上げた。
「別れてくれないか。明子……」
信吉の言葉を、明子は正確に受けとめなかった。
夫の声が、くぐもっていたせいもある。
明子が聞き直すと、信吉は前よりもやや、決然とした調子でいった。
「別れたいんだよ」
「別れるって……」
他人のことかと思った。
「誰が、別れるんですか」
信吉の表情が気弱くなった。
「俺とお前だよ」
「私たちが……」
なにを馬鹿なという気持だった。
「冗談はやめて下さいな」

テーブルに近づいて、謡の稽古本を風呂敷に包んだ。
「本気だよ」
「どうして、別れるんですか」
明子の声は笑いを含んでいた。馬鹿げたことをいい出した子供をたしなめるような調子でもある。
「子供が出来たんだ」
沈痛にいった。沈痛だが、声の底に、わくわくしたものがある。
「子供……」
「俺の子だよ」
「どこに……」
「千枝子という女なんだ……」
「千枝子……」
急速に、明子の想像が動き出した。
「バアの女に欺されたんじゃないの」
夫の浮気という現実感が、どうしても明子にはなかった。
「モデルなんだよ」
「モデル……」
婦人服の輸入会社であってみれば、たしかにファッションモデルと交流はある。
殊に、信吉が会社で担当しているのは、パリやミラノへ出かけて行って、むこうのコレクションをみて、服や布地の買いつけをしたり、それらを、日本のファッション雑誌や婦人雑誌のグラビアに紹介したりする、いわゆる品物をえらぶこととそのコマーシャルの部分が多い。信吉のファッションに対する感覚がいいのと、彼の容姿が華やかな社交的な場所に向いている理由のためであった。
従って、モデルの女たちとつき合いがあっても可笑しくはない。
そういえば、ファッションモデルとつき合うのは、金がかからなくて良いと信吉がいったのを、明子は咄嗟に思い出していた。
「レストランへ連れて行っても、サラダしか食わないんだよ」
そのかわり、サラダに対する食欲は旺盛で、まるで兎と飯を食っているようだといった信吉の声までが浮んで来て、明子は俄かに血が荒れはじめた。
「いつからなんですか、その人と……」
「一昨年……」
「一昨年の……」

「春だったかな」
「はっきりして下さい」
声が甲高くなった。
「五月だ、五月の三十日……」
それが初夜だったといわれて、明子は完全に逆上した。
「知らなかったわ、あなたが浮気していたなんて……」
「最初は、浮気だったんだが、子供が出来て本気になったんだ」
煙草を灰皿に消し、両手を前に組み合せて、信吉は受難者のように頭を垂れた。
「あなたの子なんですか」
「千枝子は、ふしだらな女じゃない、俺の子に間違いはないんだ」
「女房のある男と、そんなことになって、なにが、ふしだらじゃないんですか、冗談じゃないわ」
別れません、と明子は叫んだ。
「私のほうには別れる理由なんてありませんからね」
「俺のほうには、あるんだ」
「勝手だわ」
「だから、こうして頼んでいるんじゃないか」
「頼まれて、はい、別れますなんていえますか、昨日今日、夫婦になったわけじゃなし」
「財産はみんなやるよ」
ボストンバッグの中から一枚の紙を出した。
「ここに俺名義の財産を全部、書き出して来た。慰謝料としてお前にやる。それで勘弁してくれないか」
「そんなに、その女が好きになったの」
「女じゃないんだ、子供のためなんだよ」
「子供……」
「子供が出来たといったろう」
「妊娠したんですか」
「来月、生まれるんだよ」
予定日は節分だといった。
立春大吉に誕生したら、男の子なら大吉と名づけ、女の子なら千春にしようと思うが、
「どうだろうね」
明子は口がきけなくなった。
ぬけぬけと他の女にこれから生ませる子供の名を妻に相談する馬鹿はないと思う。
「女だけのことだったら、お前にこんなことを頼みはしな

い。子供が生まれてくるものだから、その子に対して父親としてするだけのことをしなければならないと思ってね」
「だから、私を離婚するの」
「すまないとは思っているんだ。しかし、子供の将来を考えたら、そうするより仕方がないんだよ」
「子供、子供って……子供を枷にするのね」
不意に明子は涙ぐんだ。
「私に子供が出来ないから……」
事実、結婚して二十年になるのに、子供は出来なかった。医者にも診てもらったが、別にどこも悪くないといわれた。
冷えるのがいけないのではないかといわれて、和服を着るようにしたり、漢方薬も続けた。
夫には内緒で神信心のようなこともしてみた。
それでも、どうしても出来なかった。
「あなたに欠陥があるのかも知れないわ」
明子がいい出して、信吉も医者の診察を受けて来た。
「異状はないそうだ」
夫婦の合い性が悪いのではないかと占者にみてもらったといった。
「明子の星のほうが強すぎるらしいんだ。それで子供が出来ないといわれたよ」
「まさか……出まかせだわ」
「当るも八卦というからな」
「当らぬも八卦のほうですよ」
そんな笑い話をしたのが、もう十年も前のことで、いつの間にか、子供のことはあきらめムードになってしまった。
「こんな時代だからな。子供は出来ないほうがいいかも知れない」
信吉が、そういうようになった。
大気も食物も汚染されて、公害が人間をむしばんでいる。
「そんな世の中に生まれて来て幸せかどうかわからないだろう」
東京には明日にも大地震が来るようにいわれているし、地球はだんだん冷えているともいう。
「子供がいたら、苦労なものだよ。夫婦二人だけのほうが、ずっと気が楽だ」
なにかにつけて、そんなことばかりいっていた信吉が突然、豹変した。
「子供はいらないといっていたのは、嘘だったんですか」

信吉は妻を眺め、小さな声で答えた。
「本当は欲しかったんだ」
だが出来ないと諦めていたものが、思いがけず、女を妊娠させた。
「なんというか、お前には申しわけないけれども、この年になって我が子が出来るなんて、嬉しくてたまらないのだよ。その気持だけはどうするわけにも行かない」
椅子からすべり落ちるようにして、床に両手を突いた。
「この通りだ。たのむから、別れてくれ」
石になったように、明子が返事をしないでいると、やがて信吉は立ち上り、ボストンバッグを下げて出て行った。
追う気にもならず、明子は椅子に釘づけになっていた。
華々しく夫婦喧嘩をするにしては、信吉の態度が真剣すぎた。ひどく、切羽詰まったような信吉をみていると、なにをいっても喚いても、明子の一人相撲になるような気がする。
夫に立ち去られて、明子も真面目にならざるを得なかった。
といって、信吉と別れるつもりはなかった。
甲斐性のあるほうではなかったが、誠実で優しい性格だったと思う。
見合結婚だったが、信吉のほうが一目惚れして、毎日のように長電話をかけて来て、結局、明子がそれにほだされたという形で、結婚を承知した。
それだけに信吉は明子を大事にしてくれた。
新婚旅行の行く先にしても、明子が熱海へ行ったことがないというので、伊豆山に決めた。
式の当日の衣裳にしても、明子が打掛だというので、信吉も紋付袴にし、色直しにドレスを着た花嫁に合せて、彼もタキシードになった。
結婚当初は一戸建ての家だったのを、外出に不便だというので、マンションに移ったのも明子の意見である。
別に、明子が我儘を通しているわけではなかった。
明子がこうしたいといえば、信吉は直ちに賛成し、それが夫婦二人の意志になった。
そのかわり、信吉には実行力に欠けるところがあるので、明子が走りまわって、式場をみつけたり、旅行のスケジュールを作ったりしなければならなかったし、このマンションにしたところで、明子が広告をみたり、友人知人に依頼したり、あっちこっちみてまわって買ったものである。

信吉のいいところは、明子がなにをしても、なにを決めても反対しないことであった。
必ず、
「これはいい、最高だ」
と気に入ってしまう。
それで、明子は夫婦は一心同体という言葉を自然に信じ込んでしまっていた。
二十年の夫婦生活の中、いわゆる夫婦らしい夫婦喧嘩はしても、おおむね、仲のよい夫婦であった。明子の友人たちは、
「いつまでも、新婚みたいね」
と冷やかしたり、明子はそれを子供のないせいかと考えていた。
倦怠期というのも、明子は意識しなかった。
夫に訊いたこともあったが、
「俺達には関係ないんじゃないか」
といわれて、安心した。
明子が夫に対して不満があるとしたら、それは、彼の仕事に対する性格であった。
いわゆる猛烈サラリーマンのエネルギッシュなものに欠けている。
実業家として辣腕をふるうとか、精力的に事業を発展させるとかの才能と気力に不足している。
佐伯商事は、彼の祖父と父親と二代かかってこれまでにした老舗であった。
特に戦後の躍進ぶりはめざましいものがある。
祖父と父の血を受け継いだにしては、信吉は、おっとりしすぎていた。それが、三代目というものかも知れない。
明子にしてみれば、みすみす佐伯商事の三代目に生まれながら、会社の実権は信吉の姉である宗子の智に当る進一郎に移っているのが、じれったかった。
もっとも、宗子は信吉より五歳年上で、結婚も早かった。
二十一で宗子が進一郎と華燭の典をあげた時、智に来た進一郎は二十七歳、信吉は十六歳であった。
もともと、進一郎は、宗子の父の佐伯源吾のめがねにかなって娘の智にのぞまれた男だけに、義父である社長に最初から徹底的に商売を叩き込まれ、鍛え上げられた筋金入りである。
佐伯商事の実務にくわしいのは当然だし、おっとり、のんびり育って来た信吉とは立場も違う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

で、父親の社長は、二人の性格を見抜いていて、実務的なことは進一郎に、外交的なことは信吉にとわけているのだが、エネルギッシュな実業家というイメージでは、どうしても、進一郎のほうが佐伯商事をしょって立っているという感じがする。

そして、信吉のほうは、この義兄にライバル意識もなにもなく、実の兄弟のように仲むつまじくやっているのも、明子にとっては、男として歯がゆいような気がしないでもなかった。

不満をいい出したら、きりがないが、明子にとって、二十年の夫婦の間柄はまず平凡で平和の連続であったし、これが、どちらかが墓の下に入るまで続くものと信じて疑いもしなかったのである。

その妻の信頼を、夫は或る日、突然に裏切った。

暫くの間、明子は眼がくらむほど腹が立って来て、一人で泣いた。

だが、それがおさまって考えたのは、やはり夫婦の年齢のことである。

信吉は四十七、明子は四十になったところである。

男の四十七は、なんということもないだろうが、女の四十は明子にとって重大な現実であった。

三十代の中なら、まだやり直しが出来たかも知れないと明子は考えた。

信吉でない男性を好きになって、その男性から愛される可能性もないとはいえない。

だが、四十という年齢の女に、愛だの恋だのというのは、もはや無縁のように思える。

四十歳になった時、明子はなんとなく自分の人生も峠を越えてしまったという意識を持ったものである。

華やかなものは終って、これからは一年一年、老いを自覚することになる。

「四十が境目よ」

明子と一緒に謡の稽古をしている女たちは口々にそういった。

「四十をすぎると、もう駆け足って感じなのよ。白髪が増えるのも、腰が痛くなるのも、眼のまわりなんて、明るいところへ鏡を持ち出してじっくりみてごらんなさい。もう、自分で自分の顔に眼をそむけたくなるわよ」

年より派手なものを身につければ、老女の厚化粧のようにいわれるし、若がって振舞えば、年甲斐もなくと非難さ

れる。
「なにをするのも四十までよ。四十すぎてごらんなさい。第一、男がふりむかなくなるんだから……」
どんな美人も四十までというのが、彼女達の常識であった。
女という武器が通用するのも四十までであるという。
「四十すぎたカマトトなんて、醜いだけじゃありませんか」
笑いながら聞き流していた言葉の一つ一つが、今は明子の実感になった。
四十すぎた女に、面白いことなんぞ、まずないと知らなければならない。
その日から、信吉はマンションへ帰って来なくなった。
思い余って会社へ電話をしてみると、
「二、三日中に行く」
という。
帰るといわず、行くといったところに、夫の決心がみえたようで、明子は蒼ざめた。
だが、三日経っても、信吉はやって来ず、四日目の午後、客が来た。
「こういう者ですが……」
差し出した名刺には、篠原光一とあり、肩書は弁護士であった。自分で事務所を持っている。
「ご主人の代理で、うかがいました」
みたところ、まだ若かった。三十五、六だろうか。
叫び出したくなるのを、明子は抑えた。心中は煮え返っている。
二十年も夫婦だったものが、こんな赤の他人を代理に立てて、話し合わねばならないということに、まず、ひどい衝撃を受けている。
黙って向い合っている明子に、篠原はアタッシュケースの中から、書類を出した。
弁護士というものは、黒皮の古くさい鞄を下げているというイメージが明子にもあったのだが、篠原のは明るい赤茶で、しかも、ビジネスマンのようなアタッシュケースである。
気がついてみると服装も弁護士らしくない感じであった。
ベージュに茶や緑の入った派手な上着に、エルメスのネクタイをしている。
だが、差し出した書類も、話し出した言葉も、やはり弁

護士らしいものであった。
書類の一つは、財産目録で、信吉の名義になっている佐伯商事の株が二十万株余りある。
他に、貯金はたいしたことがなく、不動産としては、今、住んでいるマンションがある。
「ご主人は、これらを全部、慰謝料として、奥様にお渡しすると申されています」
株は非上場のもので、額面は一株五十円だから、二十万株にして一千万円にしかならないが、このところ、会社の内容がよく、配当は三割から三割五分は固い。
「配当金は年におよそ三百万ほどになりますし……」
もし、さきゆき、株を手放すとなれば、含み資産の大きい会社のことで、一株三百円ぐらいの値打があるだろうといった。
マンションがあって、年三百万ほどの収入があれば、女一人、生活にはこと欠かないであろうという信吉の腹らしい。
「なんとか、離婚に同意して欲しいとおっしゃっています」
いくら、夫が三くだり半を突きつけたところで、妻の同意がなければ、離婚は成立しない。
「主人は、今、どこに居りますのでしょう」
女のところには違いないが、
「私、なにがなんだか、わからないのです」
だしぬけに女のことをきかされて、子供が出来たから別れるとだけしか説明されていない。
「ファッションモデルの方とか、申して居りましたが、お名前は、なんとおっしゃるのでしょうか」
夫の愛人の名も、事情もわからず、離婚にめくら判をおすわけには行かないと明子はいった。
「お差しつかえなかったら、少し、お訊ねさせて下さい」
明子の口調が落ついて来たので、弁護士はやや安心したようである。
「女性の名前は、小村千枝子といいます」
「お年は……」
「二十七歳です」
ファッションモデルとしては古顔のほうで、収入もトップクラスだったという。
「只今は、仕事を休んでいます」
無論、妊娠のために違いない。

横浜の出身で母親と弟がいる。
「おきれいな方でしょうね」
嫉妬していると思われたくないと反省しながら、訊いてしまった。
「美人という点では、奥様のほうが、ずっと美人です」
篠原は、けろりとしてそんなことをいう。
「まあ、好ききらいはあると思いますが、いわゆる美人タイプではありません。強いていえば、ユニークな女性です」
明子は髪をかき上げた。
流石(さすが)に、この何日かは髪をセットすることすら忘れている。
「本当に、主人の子なのでしょうか」
小村千枝子のみごもっている子供のことである。
「それは、生まれてみなければわかりませんが、今のところ、間違いはないようです」
少くとも、信吉はそう信じている。
「その方、結婚なさったことは……」
「正式にはないようです」
二十七歳になっている女のことだから、恋人もあったろうし、それなりの過去はあったかも知れないが、
「戸籍の上は、きれいです」
もし、佐伯夫婦の離婚が成立して、信吉が彼女と結婚することになれば、彼女にとっては初婚である。
「主人は、その方と結婚するつもりなのでしょうね」
愚問が口に出た。
「お子さんのために、一日も早く入籍したいとはおっしゃっています」
明子に対しては、まことに申しわけないと信吉はいっているという。
「その点では、随分、悩まれたようです」
相手の女に子供が生まれるぎりぎりになって、漸く、決心したということなのだろうか。
「少し、考えさせて下さい」
明子はいった。
「私にとっても、一生の大事ですから……」
「勿論です。それでは、来週に亦、お電話をして、お邪魔します」
篠原はあっさり立ち上った。
玄関まで送ってみると、彼はブーツであった。相当のお

洒落である。
中肉中背だが、どこかロバート・レッドフォードに似た、男前である。
「失礼しました」
ちょっと背を丸めて出て行く姿も悪くはない。
明子はドアに鍵をしめて、化粧台の前へすわり込んだ。
鏡の中には、化粧っ気のない、蒼ざめた中年女の顔が映っている。
リビングへ戻って、テーブルの上の財産目録をみた。
夫の決心が、もう一つ、現実的に明子の胸をえぐった。
少し考えて、明子は受話器を取った。
夫の実家の電話番号を廻す。
家政婦が電話口に出た。
「明子ですけれど、お姑さま、いらっしゃいますか」
「只今、お出かけでございますが、夕刻にはお帰りになる予定です」
六時頃には帰るといって出たという。
受話器をおいて、明子は時計をみた。まだ三時であった。
信吉の両親は、息子が愛人に子を作り、妻と離婚しようとしているのを知っているのかと思う。
どちらかといえば、父親を煙ったがっている信吉であった。
案外、なにも打ちあけてないのではなかろうか。
明子は、鏡台の前へ戻った。髪にブラシをあて、化粧水を掌に取る。肌は乾いていた。寝不足が眼のまわりに出ている。
美容院で髪を洗い、セットをして、小石川にある佐伯家を訪問したのが、六時少し前であった。
玄関の沓脱ぎに、男としてはやや小さめの黒の短靴と、藤色のエナメルの草履が脱いである。
「只今、お帰りになりましたところです」
明子も何度か会ったことのある家政婦が玄関へ出て来て、そういった。
「只今、お召しかえでございますから……」
リビングへ通された。
高台にあるこの家は豪邸と呼ぶにふさわしい広さと豪華さで、リビングだけでもおよそ十坪はあり、テラスからは芝生の庭が見渡せる。
もっとも、冬の六時で、あたりはすっかり夜であった。
庭のはずれは、めかくしに樹が植え込んであるのだが、

その間から飯田橋方面の夜景がちらちらしてみえる。
十分ほど待たされたのが、明子にはひどく長く感じられた。
姑の克子はグレイのジャージイのロングスカートに、モヘアのセーターという恰好で出て来た。
外出には大抵、和服だが、家にいる時はそんなモダンな恰好がよく似合う。七十歳になった筈だが、年よりは遙かに若々しくみえた。
別段、若造りをしているというのではなく、肉体も精神も老女であることを受けつけないらしい。
「今、お父さんと信吉の話をきいて来たところなのよ」
明子の顔をみるなり、いった。
「あなた、案外、落ついていらっしゃるじゃないの」
セットした髪と、明子のツイードのスーツを眺めた。
「今日、弁護士が、明子さんのところへ行ったそうね」
なにもかも、先くぐりしていわれて、明子は顔に血が上った。
「私、とても承服出来ません。今更、一方的に離婚だなんて……」
上ずった声で明子がいった時、舅の源吾がスリッパをひきずって入って来た。
まだ夕方なのに、パジャマの上に臙脂のカシミヤのガウンを着ている。もともと、小柄なのが、老齢と共に一まわり小さくなって、女にしては大柄で骨太な感じの克子と並ぶと一層、好々爺めかしくみえる。
もっとも、それは、みかけだけのことで、この老人が煮ても焼いても食えないふてぶてしさと腹黒さを持っているのは、明子もとっくに気がついていた。
どちらかといえば、克子のほうが人柄はいい、と明子は思っている。
「あなた、明子さんは離婚に不承知だそうですよ」
克子が夫をふりむいていい、源吾がうなずいた。
「信吉の話と、違うな」
「私が別れると申したとでも、いっているのでしょうか」
ありそうなことだったが、明子は、やはり逆上した。
「私、落度はないと思います。離婚を承知しなければならない理由はなんにもありません」
「悪いのは、信吉ですよ」
さらりと、克子がいった。
「それはもう、誰に訊いたところで、信吉が悪いのですよ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com